

激動のトランシルヴァニア

—トランシルヴァニア侯国とトリアノン条約の時代—

伊藤 義明

1. はじめに

第一次世界大戦の結果、オーストリア・ハンガリー二重帝国が崩壊し、1920年のトリアノン条約によってルーマニアに併合されたトランシルヴァニアは境界線のみならず社会そのものも大きな変動を余儀なくされた。今日のルーマニアの民族問題、とりわけハンガリー人の少数民族問題もここに起因している。こういった大きな歴史的事件を背景に、トランシルヴァニアの社会内部においても大きな変化が生じていた。しかしその内部変化はすでに19世紀後半、とくに1867年のアウスグライヒ以後徐々にあらわれはじめていた。そしてこうした変化は文化、文学活動にもはっきりとしたかたちであらわれた。

ハンガリー文学史において、元来独立したトランシルヴァニアのハンガリー文学というものがあるわけではないし、ましてや学問上トランシルヴァニア文学といったいち分野が存在するわけではないが、詩文学が主流であるハンガリー文学のなかでトランシルヴァニアのハンガリー文学は日記、回顧録を中心とする叙事文学の伝統がある。このような特徴から、トランシルヴァニア的文学というものが存在しないわけでもない。トランシルヴァニア主義者はこうした伝統の上にこの地に共住する他の諸民族との間にもトランシルヴァニア的共通性があることを「トランシルヴァニアの思想」erdélyi gondolat、「トランシルヴァニアのこころ」erdélyi lélek、「トランシルヴァニア性」erdélyiségについて論じ、あるいはトランシルヴァニアを題材に創作することで、トランシルヴァニア主義運動を展開するのであるが、そこには紛れもなく政治的運動以上に文化的運動としての文化的、精神的独立性、いわばハンガリーとルーマニアの間であってどちらにも属さない、トランシルヴァニア独自の文化と精神性を強く訴えようとする彼らの強いメッセージがある。

トランシルヴァニア的なるものを考える際に、トランシルヴァニアの歴史を度外視することはできない。トランシルヴァニアの文化、その独立性と精神性は特異な歴史的環境とともに培われていったものなのだから。そしてトランシルヴァニアをトランシルヴァニアならしめている大きな要因は中世トランシルヴァニア侯国であり、その存在なしには考えられないのである。つまりトランシルヴァニアの一体性とはトランシルヴァニア侯国の実在性に対する言い換えである。トランシルヴァニア主義者が折りあらばトランシルヴァニア

ア侯国に立ち戻り、文学作品の題材ないし動機づけにしたのはそのことを如実にあらわしている。

トランシルヴァニアのハンガリー人は第一次大戦後の混乱の時代を切り抜けた。それはただ自分たちの国家が変わったにとどまらない。行政言語が突然変わり、学校教育制度はそれまでとは全く違ったものとなり、社会習慣も急激に変化したわけである。そのため彼らの精神世界そのものが大きく揺るがされざるをえなかった。この状況を彼らは少数民族の立場から思索し、生き残るすべを探求した。本論はトランシルヴァニア侯国の時代と第一次大戦後の時代、これら激動の時代に関する一片の素描である。

2. トランシルヴァニア的なるものの根源

トランシルヴァニア侯国の歴史はハンガリー・ボヘミア王ラヨシュ（ルドヴィク）二世率いるハンガリー軍が1526年のモハーチの戦いでスレイマン2世のオスマン・トルコ軍に敗北し、国王と軍隊の大部分を失ったところから動きはじめる。オスマン・トルコ軍がさらにオーストリアに進撃し、1529年に最初のウィーン包囲を行なったことはよく知られているところであるが、ハンガリーの国運とトランシルヴァニア侯国の成立を決定づけたのは、1541年に国土が三つに分割されたことによるものである。すなわちハプスブルク・ハンガリー王国、オスマン・トルコ帝国直轄の占領地域、東ハンガリー王国の三地域に分割されたことである。この時を境にトランシルヴァニアはおよそ1世紀半にわたり独立した政治的發展を遂げることになる。

トランシルヴァニア侯国は公的にはトルコの保護国というかたちをとっていたが、一世紀半にわたり存続したこの侯国には単なる保護国以上の、当時のヨーロッパの政治的均衡を保つ、一定の地政学的役割があった。むろんトランシルヴァニアの為政者が全ヨーロッパ的視野をもっていたかどうかは大きな疑問である。が、少なくともハプスブルク帝国とオスマン・トルコ帝国がせめぎ合うその狭間で、みずからの存続と独立性を守るためにいかなる政治的手法を労しても、両帝国間の均衡状態の上で揺れ動きながら自主独立を確保しなければならないとする強い使命感が働いていた。そこで順を追って試みることにする。

モハーチの戦い以降、ハンガリーはハプスブルク帝国とオスマン・トルコ帝国の絶え間ない征服の野望のため常に戦場と化していた。大領主や貴族も両派に分かれて私的戦争にふけり、両国の甘言に乗せられては他方に寝返ることも日常茶飯のことであった。この頃分裂状態にある彼らの間で二つの大きな問題が激論となっていた。一方はサポヤイ・ヤーノシュのようなハンガリー人の国王が選ばれるべきか、それともハプスブルク家が国家の支配者として承認されるべきかという国の再統一の問題である。そして他方にはローマ教

皇に対して忠実であるべきか、あるいはドイツやスイスから波及してくるプロテスタントに改宗すべきかという信仰の問題があった。

1540年にサポヤイ・ヤーノシュ（王位1526-1540）が亡くなるとトランシルヴァニアの「分離」separatioに拍車がかかり、サポヤイの妻イザベラはハプスブルクのフェルディナント一世（カール五世の弟）と1551年に協定を結ぶのであるが、トルコとフランスの干渉によって1556年にフェルディナント一世とトランシルヴァニア議会はこれを破棄した。その後トランシルヴァニアの発展を決定したのはバートリ・イシュトヴァーン（侯位1571-1586）である。バートリは1559年にイザベラが亡くなると、その息子ヤーノシュ・ジグモンド（王位1540-1551、侯位1556-1570）を補佐しながらトランシルヴァニアの宮廷問題を処理し、地政学的判断からトランシルヴァニアを強化することにより、ハンガリーの独立性を証明する、いわゆる「我々が生き延びること」megmaradásunkをトルコの庇護下で守り通し、ハプスブルク帝国とオスマン・トルコ帝国の両勢力を牽制しながら均衡状態を保ち、安定した平和を獲得しようと考えた。

バートリ・イシュトヴァーンの後、トランシルヴァニアの方向づけをより鮮明に推し進めたのはボチカイ・イシュトヴァーンとベトレン・ガーボルである。この二人はトランシルヴァニア侯国史上最も傑出した人物であった。ボチカイは遺言書の中でトランシルヴァニアの位置づけを「ハンガリーの王冠が我々よりも力のある種族ドイツ人の手中にあり、ハンガリー王国もドイツ人に従属しているあいだ、常にトランシルヴァニアでハンガリー侯を維持することは必要であり、有益なことである」と記しているように、トランシルヴァニア侯国はハンガリー王国と完全に分離するのではなく、かといって統合するのでもなく、将来強い絆で結ばれた同盟関係ができることを望んでいた。1606年のウィーン和約の際にボチカイが侯国の国境を西へ推し進め、サトマール、サボルチ、ウゴチャ、ベレグの諸県とトカイ城を奪還したときもこの遺言書の政治理念がはたらいっていた。すなわちハプスブルク皇帝が身分層の特権を脅かすときには、トランシルヴァニア侯は常にハンガリー問題に介入することを使命と定めた。ボチカイの意志はベトレン・ガーボル（侯位1613-1629）に引き継がれ、本質的に同じようにトルコとの協定を保ちながら、神聖ローマ帝国のもとでは忠誠の効力をはかって、侯国と両帝国間の勢力均衡の状態を保持しようとした。ベトレンは侯国とハンガリー人の利益のために、そしてこれらが存続するために、一貫してその国家哲学を貫いた。トランシルヴァニアの政治は以後この二人の政治理念に負っている。

アパフィ・ミハーイ（侯位1661-1690）の治世になってもトランシルヴァニアはみずからの存在意義を明らかにしながら主権を維持し、トルコの道具にもハプスブルクの道具にもなることはなかった。アパフィは両勢力の間で「バランス政治」egyensúlypolitikaを曲がり形にも実現することに成功し、それによって侯国内の状態を安定化させることにつと

めた。また国際間の勢力関係を明らかにし、その全可能性にあたることによって外交関係を発展させた。そして西欧との繋がりを強めていこうとしたのであるが、結局のところ両帝国の干渉を完全には阻むことができなかった。アパフィの側近には教養ある抜きん出た人物が多数ブレンとして働いていた。老練な宰相ベトレン・ヤーノシュ、若き顧問官テレキ・ミハイ、外交官バーンフィ・デーネシュ、さらに後に宰相となった若きベトレン・ミクローシュなどである。

アパーツァイ・チェレ・ヤーノシュ（ハンガリーで初めて百科全書を編纂した哲学者、教育者）の弟子であった侯国宰相ベトレン・ミクローシュはナジセベンでハプスブルク皇帝に恭順を誓う大貴族の中にあつて、クルツ（ハプスブルクに抵抗する武装集団）の反乱を耐え忍び、トランシルヴァニアのハンガリー人の没落を必然的にとまらぬ報復処置を切り抜けた。ベトレンはトランシルヴァニアの人々の激情が高まるのを押さえ、近隣諸民族との永続的かつ完全な平和を獲得するために尽力した。彼の著書『オリーブの枝をくわえるノアの鳩』（1704）には「トルコ人であれ、ドイツ人であれ、ハンガリー人であれ誰もが決してハンガリーとトランシルヴァニアを共に領有することはできぬ」と強い調子で書かれている。彼によればハンガリー人はトルコ人とドイツ人双方に対し、みずからを委ね我が身を見失う。ゆえにハンガリーとトランシルヴァニア両方を領有してはならないと記し、ハプスブルクとトルコはハンガリー人に委ねられることによって、常に危険に晒される事になる、ゆえに両地域を領有してはならないと書き記している。従ってベトレン・ミクローシュもハプスブルクとトルコ両帝国の平穏な均衡状態によって保たれているトランシルヴァニア侯国が政治的安全性の最も高い状態であると確信していた。しかもこの状態をヨーロッパ列強の力の均衡にとっても重要な要因のひとつと考えていたのである。

歴史家チェレイ・ミハイは急激に変わりつつある政治的状况の中でその現実的な時代の挑発に対して最も急進的に応えなければならなかった。そして次のようにトランシルヴァニアの独立性を旗幟鮮明にした。

今後我が愛すべき故郷トランシルヴァニアが憶えていてさえくれれば
そしてトランシルヴァニアの人々とひとつの国で穏やかに暮らせさえすれば
ハンガリーの人々と軟弱に条約を結ばなくてもよい
今と同じように恐るべき損失に煩わされないためにも

チェレイはトランシルヴァニアの危機が常々ハンガリーからもたらされていることをはっきりと認識し、ハプスブルクに属するハンガリーを除いた地域の独立を切望した。確かに根本的にはボチカイの遺言書の政治理念から完全に逸脱したわけではなかったのであるが、ハプスブルクとトルコ両帝国のバランスによって築かれるトランシルヴァニア侯国という考え方に対して、その安定要因の一方を放棄する考えに至った。以上がトランシル

ヴァニア侯国のあらましである。

これまでの歴史的経緯からもわかるように、トランシルヴァニアの独立性とは本質的に大国の政治的介入によって実現されたものであって、侯国の意志というよりも、二大国間の利害関係によってやむをえずそうせざるをえない状況がつくられたことは否定できない。しかし、このおよそ一世紀半にわたる歴史的状況がこの地域にある種独特な性格を与えていることもまた事実なのである。ハプスブルク帝国とオスマン・トルコ帝国の狭間でこの厳しい現実環境に対応して臨機応変に生きていくためには現実的かつ実践的な知性が求められたのは当然のことであつたらうし、その時々のご思考と判断の柔軟性の欠如は民族の存立をも左右しかねない決定的な死活問題を意味していた。トランシルヴァニアのハンガリー人は今日に到るまで、他の地域のハンガリー人とは異なった心性をこの点で際立たせているように思われる。トランシルヴァニア的なるものとはこうした精神的土壌の中から生成されているとみてよい。

トランシルヴァニア的なるものについて考察しようとするなら、トランシルヴァニア侯国と同様、イタリアに発する人文主義ルネサンス文化とドイツやスイスから波及した宗教改革運動も見逃すことのできない歴史的な事象である。ハンガリー史上最も繁栄したマーチャーシュ王の中世ハンガリー王国はルネサンスたけなわの時代である。15世紀後半のハンガリー王国はアルプス以北で人文主義ルネサンスの最も重要な中心地で、中欧に強く影響を及ぼしていたマーチャーシュ王の命により膨大なイタリアの文学、芸術が宮廷に取り入れられていた。これら人文主義ルネサンスによる宮廷文化は外国人、とりわけイタリアの文化人の輸入文化で模倣文化でしかないと揶揄されることもあるが、それらが当初は単なる模倣であったとしても、文化的に多種多様な刺激をもたらしたことはもとより、ハンガリー文化全体のレベルを底上げし、高めたことは否定できない。尤もより劇的な変化をもたらしたのは宗教改革運動であった。しかもトランシルヴァニアではルター派やカルヴァン派以前にボヘミアの宗教改革者フスの影響を強く受けていた。そのため15世紀前半にすでにフス教徒によるラテン語からハンガリー語、ドイツ語に翻訳された聖書の部分的写本が数多くみられる。

モハーチの戦い以後、宗教改革は市民層にまで及ぶようになり、ルターやエラスムスの影響で諸民族の言語活動が活発になるとトランシルヴァニアでも聖書、宗教歌の翻訳が競って行なわれるようになり、さらには印刷所（ハンガリー最初の印刷所は1473年ブダに設置された）が設けられ急速に宗教改革が広まった。前述したように、この地域ではモハーチの戦い以前からフス教徒の活動が浸透していたために、宗教改革運動が拡大するのを容易にした。宗教改革の波は1520年代にハンガリーに達し、トランシルヴァニアではまずヨハネス・ホンテルスによってルターの思想がドイツ系市民層に受け入れられ広まった。1550年代にはいるとカルヴァン派の教えが優勢となり、1553年ジュネーブでカルヴァンに

よって焚刑に処せられた反三位一体論者ミグエル・セルベトの思想も、ハンガリーでは再洗礼派の思想と結びついて支持者を得た。この反三位一体論の旗手としてダーヴィド・フェレンツがコロジュヴァールを中心にユニテリアン派の活動を行っていた。ルター派は自治権を有するザクセン人市民層と当初ハンガリー人貴族層の間で勢力を占め、その後カルヴァン派が入ってくると主にハンガリー人貴族層に勢力を拡張した。ユニテリアン派もカルヴァン派と同じ地域で広がったが、規模としてはカルヴァン派よりも小さく、とりわけコロジュヴァールのハンガリー人市民層とセーケイ人の一部に根づいた

中世トランシルヴァニアの社会はセーケイ人指導層、ザクセン人都市貴族、ハンガリー人中小貴族を中心とする、いわゆる「三民族」három nemzet がしばしば相互に対立していたにもかかわらず、独立した特権を有する階層として共通の利害関係で成り立っていた。そして本来ハンガリー国王が任命する「侯」vajda が最高の司法・軍事権力を持ち、その公的資格によって広大な所領を与えられていた。

トランシルヴァニアでの宗教的寛容は当時としては比類をみないものであった。1557年のトルダの議会は他のヨーロッパ諸国に先立って誰もが強制されずに古い信仰であれ、新しい信仰であれ、それに従うことができることを宣言した。そして1564年の議会はこの決定をさらに強め、1568年の議会ではすべての者が自由に宗教的信条を広めることができることも容認した。ルター派、カルヴァン派、ユニテリアン派の三派はローマ・カトリックと共に既成宗教として公認され、ルーマニア人の宗教であるギリシア正教も寛容された。母国を追放された優れた神学の思想家たち、例えばジョルジオ・ピランドラタ、ヨハネス・ゾンマー、クリスティアン・フランケン、ヤコブス・パレオロゴス、マティアス・ヴェヘ＝グリリウスらがこの寛容な土地にみずからの隠れ処を見出したのは偶然なことではなかった。また同時代の文学は宗教改革運動の思想を普及させる役目を果たしていた。プロテスタントの信奉者であったスカーロシ・ホルヴァート・アンドラーシュ、スターライ・ミハイ、ヘルタイ・ガーシュパールらは文学作品においてローマ・カトリック教会とそれを支持する封建領主を民衆の圧制者として描いた。人文主義ルネサンスと宗教改革はヨーロッパの当時最も高い文化をもたらしたばかりでなく、民族の文学や芸術などを飛躍的に発展させたが、最も重要な点は宗教の多様性によりこの地の人々にリベラルな精神を植えつけたことである。

ハブスブルクとトルコの狭間でバランスをとりながら生存していかなければならなかったトランシルヴァニアでは極めて現実的かつ実践的知性、機略縦横の知性というものが育まれた。そして宗教改革によってなされた宗教の寛容性はリベラルな精神だけにとどまらず、思想、民族の多様性をも許容する精神風土を創りあげた。トランシルヴァニアはその特異な歴史の中で、あらゆる異端者や追放者を匿ってきた。そこに一元的な純粋性ではなく、多元的な不純性を尊ぶ精神性をみることができる。トランシルヴァニア的なるものに

は同一化、一元化しえない人たちを救済、育成しようとする何らかの思考性が秘められている。

3. 大戦後の紛擾とトリアノン条約

第一次大戦によるオーストリア・ハンガリー君主国の敗北と崩壊後、中欧東部地域でも国家編成の変動と並んでハンガリー、ルーマニア両国の激しい駆け引きがみられたが、刻々と状況の変わるなかトランシルヴァニアのハンガリー人は早急に自立の道を模索しなければならなくなった。ブダペストでは市民民主主義的革命が起こり、トランシルヴァニアの至る所で国民評議会が創設され、さらに君主国家内の諸民族と国境外の同胞が同盟関係を結ぶことで歴史的國家の解体が急激に加速した。

1918年10月30日にはじまった秋薔薇革命を端緒に、1920年6月4日のトリアノン講和条約の調印までトランシルヴァニアでも将来の展望を構想するルーマニア人とハンガリー人の間で、様々な活発な動きがみられた。すでに1918年10月12日ヴァシレ・ゴルディシュを指導者とするルーマニア民族党は、ナジヴァーラドでハンガリー人の立法、行政権を否認する宣言を行ない、11月1日にはレガート（二つの旧ルーマニア王国領で、ワラキアとモルダビアを合わせた総称）とトランシルヴァニアの統合をスローガンに掲げるユリウ・マニウを筆頭にルーマニア民族委員会が結成された。

1918年10月31日にカーロイ・ミハイ伯爵の「独立と四八年党」、ブルジョア急進党、社会民主党からなる連立政府が樹立した後、カーロイ伯と少数民族相ヤーシ・オスカールは11月13日に『ネープ・サヴァ（民衆の言葉）』紙上で「トランシルヴァニア暫定措置案」を発表した。これに関してはすでに11月11日の協議の段階でトランシルヴァニアのハンガリー人指導者アパーティ・イシュトヴァーンとの合意がなされていた。そして11月9日のルーマニア民族委員会からの通達はこの「暫定措置案」に関してアラドに設けられた「ハンガリー・トランシルヴァニアのルーマニア民族委員会」とハンガリー政府代表が交渉するのに、ヤーシみずからが派遣団の陣頭に立つことを決意させるきっかけとなった。その結果11月13日から始まったアラドでの3日間の交渉に、ハンガリー側からはヤーシの他に社会民主主義者ヴィンツェ・シャンドルと法学者ショムロー・ボードグが、そしてアパーティ・イシュトヴァーンがオブザーバーとして出席した。ルーマニア側からはマニウとゴルディシュ、そしてシュテファン・ポプ＝チチェロらが出席した。ここで問題になったのがヤーシの構想した「東のスイス」ないし「カントンの自治」をめぐるハンガリー、ルーマニア両民族代表の意見の相違であった。

同じ頃、トランシルヴァニアではハンガリー人の民主的かつ少数民族としての政治組織がまだ分散的にしか行なわれていなかった。アパーティは11月1日にコロジュヴァールで

みずから議長となって「ハンガリー人国民評議会」の「トランシルヴァニア委員会」を発足させていた。委員会は全国組織で三つのグループの協力によって成立したものである。第一はアパーティが率いるカーロイ・ミハイ型の独立主義グループ、第二はコロジュヴァールの国民劇場の高名な館長ヤノヴィチ・イエヌーを代表とする市民急進派グループ、第三はヴィンツェの社会民主主義者のグループである。同じくコロジュヴァールで代議士シャーンドル・ヨーゼフとユニテリアン派教会の記録官ボロシュ・ジェルジの指導で保守的立場の「セーケイ人国民評議会」が設立された。この二つの国民評議会は12月17日に「トランシルヴァニアのハンガリー人・セーケイ人国民評議会」の名で統合した。他にマロシュヴァーシャルハイでも高校教師アントルフィ・エンドレの指導で市民急進的思想によるコロジュヴァールのもと同名の「セーケイ人国民評議会」が組織された。しかし、この二つの組織はルーマニア軍の侵攻後、中断を余儀なくされた。これら以外にもあちこちの都市で国民評議会が発足し、なかでもサトマルとナジヴァーラドでは極めて短期間ではあったが、「評議会共和国」といった局地的な権力機構も機能していた。

カーロイ・ミハイ政府は12月9日アパーティ・イシュトヴァーンをトランシルヴァニア特命全権委員に任命した。しかしながら、この任命は失敗に終わった。ルーマニア人指導者たちはアパーティを以前の発言からハンガリー国家思想に偏った一派とみなし、アラドの交渉の際にすでにアパーティに対して不信感を表明していたからである。それでもコロジュヴァールのハンガリー人の組織化は進みはじめ、12月22日にコロジュヴァールでハンガリー人の「国民大会」が開かれた。そこには多数の県と都市から代表者が集まり、なかにはルーマニア人も含まれていた。この国民大会は市民民主主義的革命に賛成の意を表明し、ウィルソンの平和的原則を前面に出してハンガリー系少数民族の民族自決権を要求した。そしてアパーティ、ヤノヴィチ、ヴィンツェの指導でハンガリー人の「統治評議会」の創設が採択された。

1918年12月11日ルーマニア国王フェルディナンドは早々と布告を出して、ルーマニアとレガートの合併を命じ、ナジセベン（ルーマニア名シビウ）に「統治評議会」を開設して三人の代表ゴルデイシュ、ヴァイダ＝ヴォエヴォド、ポプ＝チチェロを政府委員に任命した。またウィルソンの原則に基づいて非ルーマニア人居住地につくられる「地域的自治」を組織しようとする試みが起こった。テメシュヴァール（ルーマニア名ティミショアラ）では連合軍の保護下で「ハンガリー人・セルビア人・ルーマニア人の人民評議会」の発案に基づき「バナート共和国」が成立し、セーケイウドヴァルハイでは知事パール・アールパードによって「セーケイ共和国」が宣言され、最終的にカロタセグ地方でコーシュ・カーロイが「カロタセグ共和国」を組織編成した。ルーマニア国王軍が進軍して来ると、これらの政治的な組織活動の試みも結末を迎えることになった。ネクルチェアの率いる軍隊が12月24日に侵攻して来た後では、コロジュヴァールの国民大会の決議も歴史的幻想と

化した。

協商国側とルーマニア政府間でトランシルヴァニアの運命を左右しかねない秘密条約が結ばれていた。1916年8月17日ブカレストで結ばれたこの条約で当地域がルーマニアの領土となることが秘密裏に取り交わされていた。1914年に第一次大戦が始まると、すでにルーマニアは1883年10月30日にオーストリア・ハンガリー君主国と締結していた条約を破棄し中立国となった。ルーマニアは同盟国側から中立国になることで、オーストリア・ハンガリーの三国同盟側が勝利した暁にはロシア領ベッサラビア、逆に協商国側が勝利するならばトランシルヴァニアの獲得を画策していた。そしてオーストリア・ハンガリーの戦況が不利だとわかるや、ここぞとばかりに協商国側と密約を交わし漁夫の利を得ようとしたわけである。この秘密条約の内容は、第一にルーマニアは即刻オーストリア・ハンガリーに侵攻すること、第二にそれと引き換えにトランシルヴァニアの領有権が与えられること、第三にルーマニアはこの条約以外に他国との条約を禁ずるというものであった。そしてまた、これらの条項に違反した際にはこの秘密条約は無効となる、といった取り決めがなされていた。1916年8月27日ルーマニアはオーストリア・ハンガリーに宣戦布告した。ルーマニア軍はトランシルヴァニアへ侵攻するが、枢軸国側の反撃を受けて短期間で壊滅し、反対にルーマニア全土（ワラキアとモルダビア）が占領されてしまった。ルーマニアはこの敗北の結果、オーストリア・ハンガリーと講和条約を締結せざるをえず、この条約の成立時点でルーマニアのトランシルヴァニア割譲は無効となったはずであった。そもそもまだ協商国側でもなかったルーマニアがオーストリア・ハンガリーに一方的に宣戦布告すること自体問題があるのであるが、1918年11月13日のベオグラードでの停戦軍事協定後にもルーマニアは休戦ラインを踏み越えて、トランシルヴァニアへ軍隊を派遣し完全に協定を無視した。しかし1919年3月21日の「革命統治評議会」による「ハンガリー評議会共和国」Magya Tanácsköztársaság（日本では一般に「ハンガリー・ソヴィエト共和国」と呼ばれている）の樹立宣言は共産化を危惧する西欧諸国、近隣諸国からは敵視され、ハンガリーの国際的立場はより悪い状態となった。ルーマニアの政治家は武力で評議会共和国を打倒するための援助をフランスに打診していた。またフランス人部隊が黒海沿岸の都市オデッサから引き揚げる事が決定されると、ロシアで使われた武器類はルーマニア軍に譲与され、これはルーマニアの軍事力を増強させることにもなった。協商諸国の後ろ盾をえたルーマニア軍とチェコ軍は何ら抵抗もなくハンガリーへ進軍し、1919年8月1日「革命統治評議会」政府（133日で崩壊）は退陣し、8月3日ブダペストはルーマニア軍により占領された。

1918年12月1日にトリアノン条約を大きく左右したルーマニア人の国民大会がトランシルヴァニアのジュラフェールヴァール（ルーマニア名アルバユリア）で行なわれた。この国民大会ではトランシルヴァニアの自治をめざす立場、すなわちヴァシレ・ゴルディ

シュ、シュテファン・ポプ＝チチェロ、社会民主主義者らの「自治」派に対して、ルーマニア（レガート）とトランシルヴァニアの統合をめざすユリウ・マニウ、アレクサンドル・ヴァイダ＝ヴォエヴォド、シルヴィウ・ドラゴミール、ゼノビア・プクリシエヌらの「統合」派の主張する決議提案が可決された。12月31日にルーマニア人の社会主義者労働運動グループはブダペストでこの大会での宣言を非難した。彼らの主張はルーマニア人労働者の諸問題を解決するのに、第一次大戦後トランシルヴァニアが共和国となったハンガリーからルーマニア王政に併合されることで、より遅れた社会に後戻りすることを懸念して、ルーマニアとの統合に反対したのだった。

広義でのトランシルヴァニアの各民族の住民数とその割合であるが、1910年の人口調査によれば、ハンガリー人165万8736人（31.65パーセント）、ルーマニア人282万1773人（53.84パーセント）、ドイツ人55万6009人（10.61パーセント）、セルビア人・スロヴァキア人・ブルガリア人などその他の民族20万4879人（3.90パーセント）であった。この数値からもわかるように、ジュラフェールヴァールの国民大会では全人口の約46パーセントを占める非ルーマニア人住民の意志がほとんど反映されていなかった。しかもこの大会のルーマニア人参加者1228人のうち労働者、農民は6パーセントで、残りの94パーセントはギリシア正教聖職者、法律家、教師などの知識人で占められていて、とてもルーマニア人の全階層から等しく選ばれた代表とはいえなかった。従って、ジュラフェールヴァールの国民大会はトランシルヴァニアの全住民の意志を代表していなかったばかりか、当地域在住の全ルーマニア人の意志をも代弁していなかったのである。そしてあまり知られていないことではあるが、この国民大会が行なわれているとき、行政機関はまだハンガリー人によって統括されていたこともあって、ハンガリー政府は大会へ向かうルーマニア人参加者に対して鉄道の利用を無料で提供し便宜を図った。しかしルーマニア政府は地域住民の意志や住民投票による国家帰属の決定などは頭から考えておらず、トランシルヴァニアの併合にのみ血道を上げて軍隊を侵攻させるや武力でハンガリー人の国民評議会や国民大会などの組織活動をことごとく阻止した。

ここで注目すべき点は、トランシルヴァニア（バナート地方やブコヴィナ地方も含めて）のドイツ人の動向である。ドイツ人指導者たちはこの歴史的転換をより正確に見据えて、目の前にある現実的な歴史状況から自分たちの利益というものを認識していた。1918年11月29日の「ドイツ民族会議」でトランシルヴァニアのルーマニア併合に逸早く賛同したのはブコヴィナ地方のドイツ人であった。そしてジュラフェールヴァール国民大会の宣言で謳われている「どの民族も自分の言語で自民族の人間によって教育、行政、司法が受けられ、そして各民族の住民数の割合で立法団体と国家政府内での代表権が得られる」ことで少数民族の権利が保証されるとみてトランシルヴァニア・ザクセン人はこれを好意的に受け入れた。1919年1月8日ザクセン人国民評議会と中央委員会はルーマニアとの統合を

宣言した。その後ルーマニア軍がバナート地方を占領したあと、8月14日にバナート・シュヴァーベン人もザクセン人の決定に従った。ドイツ人がすべてトランシルヴァニアとルーマニアの統合に賛成していたわけではなかったが、この現実主義的対処によって最初のうちはその見返りとして、ハンガリー人とは逆に経済活動、文化活動において優遇されていた。が、しかし徐々にルーマニア政府はその本性をみせる。掌を反すように、ジュラフェールヴァールの国民大会の宣言を無視して、ドイツ人はハンガリー人と同様に「農地改革」(1921)、「国籍法」(1924)、「学校教育制度法」(1924)、「高校卒業試験法」(1925)など矢継ぎ早に悪法が導入されることによってみずからの権利が奪われていった。ドイツ人の当初思っていた大きな期待はここに脆くも敗れ去った。

1920年6月4日トリアノン講和条約に調印がなされ、トランシルヴァニアは正式にルーマニアに譲渡された。ハンガリーが割譲された領土は「歴史的トランシルヴァニア」よりもはるかに広い領域である。ハンガリー人の居住地域がこれほどまでに条約によって狭められたのは、ハンガリー評議会共和国誕生による共産化の波及を阻止すること、協商国と隣接国の利害関係、鉄道網の確保など様々な理由が考えられるだろう。しかしトランシルヴァニアの少数民族問題を考えるとき、この地域に最も強い権限をもっていた協商国、とりわけフランスの責任は甚だ重い。

4. 脱中央集権の文学から「ルーマニアのハンガリー文学」へ

第一次大戦後トランシルヴァニアのハンガリー人社会では、みずからの将来を明確に認識できないまま、一方では母国と引き離されて少数民族として生きていかなければならないと自覚する者があれば、他方では国家の支配交代を一時的なものと楽観視する者もあり、この未曾有の歴史的事件をなかなか直視することができなかった。ルーマニア政府の少数民族に対する抑圧は日増しに強まり、すべての公共の組織的機関が閉鎖され、政治活動も文化活動も思うようにできない環境でハンガリー人はみずからの新たな精神的、文化的基盤を創出しなければならなかった。その際大きな支柱の一つとなったのは文学活動であった。

「ルーマニアのハンガリー文学」romániai magyar irodalomと「ハンガリー系少数民族」magyar kisebbségは同年齢である、としばしばいわれる。つまりどちらもトリアノン条約の結果生まれた概念なのである。ルーマニアのハンガリー文学は同じような環境で生まれたスロヴァキアのハンガリー文学やヴォイヴォディナ地方（現在セルビア・モンテネグロ）のハンガリー文学以上に1920年代に非常に創造的な活動を行なった。しかしルーマニアのハンガリー文学はトリアノン条約のあと突然生まれてきたものではなかった。その前提条件はすでに1867年アウスグライヒ以降はっきりと現われはじめていた。

アウスグライヒを境にハンガリー政府の政策は政治、経済、文化のブダペスト一極集中と同化政策を意図し、地方の独立性と発展のためのあらゆる活動を阻害した。さらに資本主義の浸透と発展もブダペストを中心とする中央集権化に拍車をかけた。この地域の特性を一掃しようとする中央集権化は郷土意識に目覚めるトランシルヴァニアのハンガリー人の感情を傷つけ、暴力的なハンガリー化政策によって住民たちの経済的、文化的利益をも損ねた。資本主義経済の大きな格差によって、トランシルヴァニアのあらゆる才能がブダペストに吸収されてしまった。こういった文化的中央集権化はトランシルヴァニアの文学をますます貧困にさせ、地元の文壇は旦那衆、聖職者、教師の偏狭で好事的な保守的文学で占められていた。こうした状況を打開するような事件がようやく起きた。1908年と1909年に現代抒情詩のアンソロジー『明日』Holnap が当時最も開けた地方都市ナジヴァーラド（ルーマニア名オラデア）で出版された。新しい潮流の直接的な出発点となる『明日』はハンガリー近代文学の誕生として脱中央集権の文学と進歩的文学の密接な関係をも示している。「その頃《ハンガリー文学の脱中央集権化について》何度も問題になった。そしてケレシュ河岸のパリ（当時ナジヴァーラドをこのように呼ぶことがあった）がとにかくこの課題に最も相応しい場所だと思った。この血の都市（詩人アディ・エンドレがこう呼んだ）は当時地方で、近代文化の最も生彩のある、最も喧騒な棲家だった。アディ・エンドレ、クルーディ・ジュラ、ビーロー・ラヨシュ、ナジ・エンドレもここからブダペストへと飛び立った」と詩人ユハース・ジュラは当時のナジヴァーラドの文学事情を語っている。

新たな潮流の兆しが見えてきたとはいえ、まだ依然としてハンガリー国内でも、トランシルヴァニアでも保守的勢力が強かった。とくに各地域の文学協会は保守的文学を支援するような役割を担っていた。世紀転換期のコロジュヴァールの「トランシルヴァニア文学協会」、マロシュヴァーシャルヘイの「ケメーニ・ジグモンド協会」、ナジヴァーラドの「スイグリゲティ協会」などはブダペストの「キシュファルディ協会」と似たような働きをしていた。そしてトランシルヴァニアの脱中央集権の文学は保守的なこれらの文学協会と対立して形づくられていった。当初は脱中央集権の文学の運動は各地域の革新的な試みをただ代弁していたのではなく、世紀転換期あたりから新興有産階級の成長につれて発展しつつある地方都市の文化水準をも高めていこうとする意図が含まれていた。この影響を受けて1908年テメシュヴァールで「南部文学協会」が設立され、1909年コロジュヴァールで若い世代の作家たちが文学選集『共通の道で』を出版した。これらの最初の試みに続いて1920年代の「ルーマニアのハンガリー文学」に道を開く雑誌がうまれた。1911年コロジュヴァールで『進歩』、1914年デーシュで『トランシルヴァニアの監視人』、1915年コロジュヴァールで『コロジュヴァール評論』、1918年同じくコロジュヴァールで『新トランシルヴァニア』が創刊された。これらの雑誌において、後にルーマニアのハンガリー文学で主要な作家となるべき人たちがすでに結集していた。そして1920年代にルーマニアのハ

ンガリー文学の「全盛期」hőskor を築き、1928年にトランシルヴァニア主義の中心的雑誌『エルデーイ・ヘリコン』Erdélyi Helikon を創刊した。

評議会共和国崩壊後、多数の作家が難を逃れて亡命してきたため、トランシルヴァニアの文壇は非常に多彩な顔ぶれで構成されていた。彼らの中にはリベラリストの他に、社会主義者やマルクス主義者も多数含まれていた。そして、こうした人たちと大戦前からの脱中央集権的な人たちが合わさって、大戦後のルーマニアのハンガリー人知識層をかたちづくっていった。トリアノン条約後のトランシルヴァニアでは、異端とされた神学者たちが母国を逃れてこの地に身を寄せたように、ハンガリー国内の白色テロで一掃された多数の左翼系知識人が逃れてきて、ちょうどかつての宗教改革時代を彷彿させるようであった。後に社会科学の普及と発展に大きな役割を果たした、左翼系雑誌『我々の時代』Korunk は彼らの成果である。

「ルーマニアのハンガリー文学」は脱中央集権的文学の延長線上にある。この潮流はトランシルヴァニア主義として1920年代の「ルーマニアのハンガリー文学」の主流となった。トランシルヴァニア主義者は保守派、改革的保守派、市民急進派、人民急進派といった様々な主義主張の人たちを抱え込み、哲学者、聖職者、新聞記者、教師、弁護士など様々な職業の人たちから成り立っていた。この多様な人たちにおける唯一の共通項は、トランシルヴァニアそのものが問題であり、責任だという強い信念であった。彼らはトランシルヴァニア侯国と宗教改革の時代から好んで題材を選び、トランシルヴァニアのあるべき姿を描き出そうとした。そこには「文学の全能性」irodalomközpontúság という考え方が潜んでいる。つまり文学には社会のあらゆる面で責任を果たそうとする強い意志がある、というわけだ。逆説的にいえば、それだからこそ劣悪な環境の中で「ルーマニアのハンガリー文学」はより生産的かつ創造的なものになった。言うなれば、脱中央集権的文学の理想は「ルーマニアのハンガリー文学」において実現化された、と言えるのかもしれない。

(ハンガリー人の人名は姓・名の順である)

参考文献

- 中央大学人文科学研究所編『民族問題とアイデンティティ』、中央大学出版部、2001年
- 伊藤義明「《トランシルヴァニアの思想》の源流」、『人文研紀要』第37号（中央大学人文科学研究所）、2000年
- 伊藤義明「二つの民族の狭間で」、『人文研紀要』第41号（中央大学人文科学研究所）、2001年
- Erdély rövid története, Akadémiai kiadó, Budapest, 1989.
- A magyar irodalom története, Kossuth könyvkiadó, Budapest, 1982.
- Tolnai Gábor: Erdély magyar irodalmi élete, A Prometheus-nyomda és könyvkiadó nyomása, Szeged, 1933.
- Kós Károly: Erdély, Erdély szépművészet, Kolozsvár, 1934.

Indig Ottó: Juhász Gyula Nagyváradon, Kriterion könyvkiadó, Bukarest, 1978.

Sulyok István/Fritz László: Erdélyi magyar évkönyv 1918-1929, "juventus" kiadás, Kolozsvár, 1930.